アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会
第3号　2005年3月　89～106頁

釈迦とイエスに関する類似性と差異性について

許　油

1　序論

釈迦とイエスは、世界宗教の中でもっとも信者が多い大宗教の教祖である。世界において、この二つの宗教が影響を及ぼしている文化領域は非常に広く　大きな二つの潮流をなしている。宗教においては、教団が誕生した当初には統一性が保持されていた場合でも、異文化圏に入るに従って多様な形に変化することが多い。韓国に大乗仏教が入ったのは紀元後３世紀、高句麗の小獣林王の時であったが、高句麗・百済・新羅という歴史文化圏に広がるにつれ、それぞれの地域に独特の仏教が発生した。朝鮮半島から日本に入った百済の仏教も、奈良地域において独特の仏教としての性格をおびて成長した。仏教やキリスト教だけでなく、すべての宗教は伝来される地にそれぞれ根を下ろし成長してきたのである。

三国時代、朝鮮仏教は朝鮮の土壌に速やか根を下ろしたが、日本での仏教受容は韓国より急速であった。古代の奈良仏教がそうであったし、最澄や空海のような高僧が生まれ、また天台宗や真言宗のような立派な宗派ができたのである。また鎌倉時代になって仏教は大きな展開を見せることになった。

キリスト教の受容も同様である。キリスト教は19世紀に韓国に入り、今日のような韓国的なキリスト教に成長し、世界でも類例のないキリスト教として発展している。また日本でも、明治維新以降、西洋のキリスト教が、上流社会から受け入れられ、日本の精神（とくに武士精神）を持つキリスト教に成長し、今日のキリスト教を生み出している。

この論文では、多元的な宗教状況の中に根を下ろして成長してきた仏教とキリスト教がどのような点で類似しており、どのような点に違いがあるかを比較する。特に、釈迦とイエスとの間、また仏教の戒律とキリスト教の戒律との間における類似点と差異を考察したい。

2　仏教とキリスト教の比較

（1）釈迦とイエスの名称

①　釈迦

仏教の開祖である釈迦の名前は、釈迦牟尼とも言い、または釈迦文とも称する。「牟尼」や「文」は接尾語であり、異なる形をしているが意味は同じ、つまり共に能仁寂黙[1]を解釈したものである。ただし、仏教信者は一般的に「釈尊」とか「釈迦」と呼んでおり、学術的な用語としては、「仏陀」と表現する人が多い。仏陀は、釈迦自らが悟りを得たという意味で付けられた名称で、「悟った」という意味である。悟ったという意味、つまり万物を悟り体験するという意味から、また釈迦は「如来」とも言われる。したがって、寺の僧や信者は「釈迦如来」とも呼んでいる。

釈迦の本名は「ゴータマ・シッダルタ（瞿曇悉達多）」である。ゴータマ(Gotama)とは、最高の位置、最高者という意味であり、シッダルタ(Siddhartha)とは、成就するという意味である。これは、ユダヤ思想における「メシア」の意味に通じるものである。というのも、後述するように「メシア」には神の業（救済）を成就したという深い意味があるからである。

また、上述の仏陀という名称は、仏教思想では第一になった仏を意味するが、衆生たちも釈迦のように善を行うことによって仏になることができる。これに対して、キリスト教の教えは異なる。人間は罪を許され救われることはあっても、あくまで人間であって、イエス・キリストにはなれないのである。

②　イエス・キリストの名称

イエス・キリストの名称は、釈迦の場合と同じく様々である。今日のキリスト教会やキリスト教信者は「イエス・キリスト」と呼んでいる。「イエス」も「キリスト」も、新約聖書ではギリシャ語で記されているが、その元々の意味はユダヤの伝統に遡る。この点は新約聖書でも意識されており、マタイ福音書では、「イエス」との命名について、「この子は自分の民を罪から救うから」という理由が付されている（マタイ 1:21）。名称には、それぞれ意味があるのである。これに対して、「キリスト」はユダヤ教の「メシア」という言葉のギリシャ語訳であるが、元々「油を注がれた者」いう意味を持つ。すなわち「メシア」は、旧約聖書では王や祭司（油注がれた者）が就任式で油を注がれたことに対応しており、後に、正しい政治によって国を統治する理想的な王、また神の救いをもたらす「救い主」を意味するようになった。このように見ると、「イエス」も「キリスト」も、ユダヤの伝統では元来類似した意味を有していたことがわかる―もちろん、イエスが人名（固有名詞）であり、キリストは称号（一般名詞）という基本的な違いはあるが―。

新約聖書は、この旧約のメシアがイエスという人間となって到来したと宣言しており、それに対して旧約聖書はキリストの到来の準備に対応するものと解されている。この旧約聖書とイエス・キリストとの関わりでもっとも重要なものは、旧約聖書の預言者によるメシア預言であり、イザヤら預言者たちは、ユダヤ民族を救済するメシアを待望して様々な預言を残している。こうした

(1)　すべてに精通しておりできないことがない神格を意味する言葉。

メシア待望（旧約）とメシア到来（新約）との関連を具体的に見るために、以下において、「インマヌエル」と「ラビ」の二つの名称を取り上げてみよう。

まず、「インマヌエル」であるが、マタイ福音書（マタイとルカの福音書は、他の文書に比べイエスの誕生物語を詳しく記述している）は、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」(マタイ 1:23)と述べており、このインマヌエルの意味は続いて「その名は、『神は我々と共におられる』」の意であると説明されているが、このマタイ福音書の「インマヌエル」を含む箇所は、旧約聖書のイザヤ書の７章１４節の引用であり、この名称が、メシア預言とメシア到来という関係性を示していることは明らかである。

次に、「ラビ」であるが、これはユダヤ人が優れた教師に対して用いた尊称である。バビロン捕囚以降のユダヤ教においては、ラビには３段階があったと言われるが、「ラブ」（師）が最下位で、次が「ラビ」（先生）、最高位が「ラボニ」（わが主、わが師）である。ただし、ヨハネ福音書は、ラビもラボニもただ「先生」と解している（ヨハネ 1:38 と 20:16）。

では、イエス自身はこのラビという名称についてどのように考えていたのであろうか。マタイ福音書は次にように伝えている。「そのすることは、すべて人に見せるためである。聖句の入った小箱を大きくしたり、衣服の房を長くしたりする。宴会では上座、会堂では上席に座ることを好み、また広場で挨拶されたり、『先生』（ラビ）と呼ばれたりすることを好む。だが、あなたがたは『先生』と呼ばれてはならない。あなたがたの師は一人だけで、あとは皆兄弟なのだ」（マタイ 23:5-8）。つまり、イエスは当時のユダヤ教における偽善的な態度と「ラビ」という尊称との結びつきを批判的に捉え、イエスの弟子たちの間では「ラビ」という言葉が示すような上下関係ではなく、平等な関係がふさわしいとしているのである。しかし、この引用箇所に続いて、「『教師』と呼ばれてもいけない。あなたがたの教師はキリスト一人である」（マタイ 23:10）とあることから考えれば、イエス自身はともかくとして、原始キリスト教会で、イエスに「ラビ」という尊称が付与されていたことは明らかであろう。ここに、旧約聖書の伝統（知恵文学）あるいはユダヤ教と、新約聖書あるいはイエスとのつながりを見ることができる。これは、次の引用からも裏付けることができる。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。ある夜、イエスのもとに来て言った。『ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。』イエスは答えて言われた。『はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない』」（ヨハネ 3:1-5）。つまり、二コデモは、当時のユダヤの習慣あるいは伝統に従って、イエスを「ラビ」と呼んでいるのである―もちろん、このヨハネ福音書の記事の意図は、イエスをユダヤ教的観点からラビと呼ぶことの問題を論じることにあるのではなく、むしろ、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」というように、ユダヤ教的な慣習的な見方の転換の必要性を示すという点にあるわけであるが―。この他に、イエスをラビと呼んだ箇所は少なくない。

以上からわかるのは、釈迦にもイエスにも、生まれた国の慣習や宗教的伝統にしたがって様々

な呼称が用いられているということである。

（2）釈迦の誕生とイエスの誕生

ヨハネ福音書では、イエスは、自分を真理であり道であるとし、この道と真理を通してでなければだれも天国に行くことはできないと述べるが、それに対して、釈迦は、だれでも慈悲と布施を施した者は仏になり成仏して極楽往生すると述べている。これは、イエスと釈迦との間の大きな違いであるが、ここでは、二人の異なる点あるいは類似した点を、二人の誕生の仕方との関わりで考えることにしたい。

韓国や日本における季節のイメージから言えば、イエスは12月（クリスマス）の寒い冬に生まれ、それに対して、釈迦は暖かい4月8日に生まれたといった点で、大きく異なっているように感じられるかもしれないが、しかし、イエスと釈迦に付与されイメージ（伝説）の中には、両者の類似点も見ることができる。たとえば、二人とも長男である点、あるいは、イエスは馬小屋で生まれ、釈迦はルンビニの池のほとりの菩提樹の下で生まれたといった点である。ここでは、イエスの誕生と釈迦の誕生に関する研究として、イエス・キリストの福音書と釈迦の経伝を研究したハユサンの『人間イエスと仏陀』を取り上げ、彼の説を紹介することにしたい(2)。

イエスの誕生物語の特徴をみるため、少し長くなるが、ルカ福音書1章の26節から38節を引用してみよう。

> 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。」マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

このルカ福音書におけるイエス誕生の物語は、通常の人間の判断から言えば、突然始まると共に、しかも驚くべき展開を示している。つまり、ある日神は、ガリラヤ地方のナザレの町に住む

(2) ハユサン『人間イエスと仏陀』シンワン文化社　1984年、59-62頁

ヨセフ（マタイ福音書によれば、ダビデの子孫）の婚約者マリアという女性のもとに、天使をおくり、驚くべき内容のメッセージ、「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けない」と告げさせる。この突然の天使の出現とその告げた言葉は、まだ男性と交わった経験のないマリアにとって驚愕すべきものであり、当然マリアはそんなことがどうしてあり得るのかと聞き返さざるを得ない。しかし、これに対する天使の答え、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」との言葉は、人間的経験からすればやはり驚くべきものであるが、それにもかかわらず、今度マリアはそれを素直に信じた。これが上記の物語の要点である。

ここから読み取れるのは、イエスの誕生をめぐる、人間の視点と神・聖霊の視点とのコントラストである。イエスの誕生が、完全に神の意志によって聖霊の力で生じたということを、上の引用ははっきりと物語っている。これに対して、釈迦も生まれたときに、イエスの場合と同様に、天から急に予言の声がしたという記述を様々な経伝の中に見ることができる。以下、この点を詳しく見てみよう。

ヒマラヤ山の南のふもとにタライという森があり、その近くにカピラ王国があった。当時の国王は浄飯王であり、王妃は摩耶婦人であった。ある夏の日、王妃は二人の侍女に両側で扇をあおがせて、暑さをしのいでいたが、夜が深まる頃、急に叫び声を上げた。 侍女がびっくりして王妃の顔を覗いてみると、王妃はにっこりしながら言った。「ただ今、歯が６つある白い象が天から降りて私の胎内に入ったので叫んだが、だんだん気分がよくなった」と。その月から王妃は妊娠した。そして 280 日が経ち出産までの日も残り少なくなっていた頃、王妃はルンビニ園に行き、そこで養生した(3)。ルンビニ園とは、王妃の故郷である燐国の拘利城の国境近くにある別荘のことである。

インドの習慣では、毎日昼と夜、水辺に行って沐浴をするのが習わしであったが、王妃も晩春の４月８日（陰暦）の真昼、ルンビニ園の南西側にある近くの池に沐浴しようと行き、蓮の花が浮かんでいるきれいな水の中に入った。ところが、急に出産の気配があったので急いで建物に入ろうとして水から出た。しかし、20 歩ほど歩くと、もうそれ以上１歩も歩けなくなった。王妃が身を支えるために横にある菩提樹の枝につかまると、仏陀が生まれた(4)。

そのとき、雌と雄の二頭の象が現れ、暖かい水と冷たい水を両方から吹き出して、生まれた子の体をきれいに洗ってくれたが(5)、すると、幼子は急に立ち上がって、静かに四方に向かって歩いた。東へ、また西と北へと７歩ずつ歩き、それから真ん中に戻ってから、右手は天を指し、左手は地を指して、声高に宣言する。「天上天下唯我獨尊、三界皆苦我當安之」と。

「天においても、地においても、我一人だけが世の中で尊敬される資格がある」、なぜなら、「三界の生き物は皆苦しんで悩んでいるが、我は確に人々を安楽にさせることができるからだ」。これがこの仏陀の言葉の意味である。イエスの誕生の場合には、天使の登場とその言葉によって人間を超えた力の作用が物語られていたが、釈迦の誕生でも、象の登場（王妃の体内に入った白い象

(3) ハユサン　前掲書、63 頁
(4) 同上
(5) 中国の経伝翻訳では、二頭の龍が天から降りて預言したとある。

と釈迦誕生後の雄と雌の象）と釈迦自身の不思議な振る舞いや言葉によって、釈迦の誕生が通常の人間の経験を超えた出来事であることが示されている。ここに両者の類似点を見ることができる。以下、釈迦誕生の際の「天上天下唯我獨尊、三界皆苦我當安之」という言葉を手がかりに、さらに比較を進めてみよう。そのために、先ほどのルカ福音書の続きの部分（２章の１節から１４節）を、引用しておきたい。

> そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、 主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町　で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。
> 「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」

釈迦が生まれたときの「天上天下唯我獨尊、三界皆苦我當安之」のように、イエスの誕生では、天使が現れ、イエスが救い主メシアであることを告げ、またそれに天の大軍が加わり、「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」と賛美している。釈迦の誕生もイエスの誕生も、その意味はこれらの言葉の中に集約されて現れている。つまり、すべての生命の苦を救うがゆえに、天と地で絶対的な位置を占める釈迦と、すべての人間の救い主で、天の栄光と地の平和をもたらす点で、唯一無二のメシアであるイエスとを比べるとき、二人は、その尊い宗教的使命あるいは絶対性において、同等の位置を占めていると言えよう。

さて、釈迦が生まれ、うれしさの最中に、釈迦の母親は健康が悪くなり、７日目になくなってしまった。それで、彼女の妹にあたるマハバザバディが幼い釈迦を育てることになる。その時、ヒマラヤ山中で祈っていたアシダという仙人が弟子たちをつれてカピラ城を訪れたが、アシダ仙人は、幼い釈迦を見て、涙を流して予言した。「太子は真にめでたい兆しの顔をしています。もし在世すれば世を治める転輪聖王になり、出家すれば広く人類を救う大覚者になるでしょう」と。そして、この仙人はさらに声を上げて泣いた。王がいぶかしげに思い、その理由を聞くと、彼は言った。「私はもう年老いて、これからの太子の成長を見ることができず、そのすばらしい説法も聞く

(6) ハユサン　前掲書、65頁

ことができません。なんと悲しいことでしょう」。それから若い弟子に、「お前は見たり聞いたりできるから、どれほど幸せなことか」と祝福するのであった。このアシダ仙人の物語においても、釈迦が「天上天下唯我獨尊」であったこと、修行によって人間の最高人格の象徴である仏陀になる大使命と大抱負を持つものであることが、表明されていると言えよう(6)。

釈迦が誕生後に母の死という不幸に遭遇したように、マタイ福音書によれば、イエスも生まれて何日も経たないうちに、ヘロデ王によって殺されそうになるという経験をした（マタイ 2:13-23）。夜、天使が現れ、イエスの父ヨセフに夢で告げて、エジプトに逃げるように命じ、それによってイエスは難を逃れることができたのである。そして、ヘロデが死亡したとの知らせを受けたのちに、再びイスラエルに戻ったのである。

（3）韓国における初八日及びクリスマス

次に、仏教とキリスト教が韓国に入り、それぞれどのような独特な仕方で発展したかについて、釈迦とイエスの誕生の祝い方を見ることにしたい。

①　初八日

初八日というのは旧暦四月八日、つまり釈迦の誕生日を指している。世界においても稀なことであるが、韓国ではこの日を祝日としている。この日はすべての国民が寺や公園で休暇を楽しむ。この日には、もちろん釈迦の誕生が祝われるが、中心は、仏心を求める宗教性というよりも、むしろ民俗的遊びの要素にあるように思われる。すなわち、この日には灯明行事や観灯遊びを中心にした様々な民俗行事が行われるのである。この様子を具体的に記してみよう。

灯明行事では、スイカ灯、亀灯、鴨灯、日月灯、鶴灯、船灯、蓮花灯、鯉灯、瓶灯、楼閣灯、釜灯、麻灯、花瓶灯、鈴灯、万歳灯、太平灯、病灯、富福灯などの趣向を凝らした煙灯が飾られるが、灯を吊すにも灯吊しの棒を立てて各種の旗で飾り、きらめき輝くまばゆいばかりの煙灯を作る。また川には煙灯をのせた船を浮かべて、世の中を煙灯一色に変えるのである。

このような祭りの雰囲気を帯びた灯明行事は、自然に多くの人々が楽しむ見せ物へと発展したが、これを観灯祭という。煙灯と観灯には、各種の民俗的遊びが結びついている。たとえば、色とりどりの灯とその光と影を用いた灯遊びがある。これを影灯遊びというが、紙に、『犬と鷹をつれて馬に乗った人が、虎、狼、鹿、ノル（シカ科の動物）などを狩る姿』を描いて、それを影灯のなかの「取り替えの枠」に張り付ける。灯が風でぐるぐる回るにつれて、様々な影絵が映し出されるのである。また、このようにして作られた灯を、豪華に飾った棒に吊す。多い場合には10個あまり、少ない場合でも3個くらいある。高麗時代にはこのような灯吊しの棒は寺のみならず、官庁や市場、一般民家に至るまで、どこにでも見られたが、朝鮮時代に入ってからは、寺や民家に限られるようになった。今日では家ごとに一家一灯運動を展開しているが、たいていは寺のみが煙灯を吊している(7)。

(7) http://www.koreandb.net/holiday/heritage/day0408.htm

寺のようなところで灯を吊すには布施をする必要があるが、布施した人の名は灯に記される。布施の金額は特別に決まっておらず、個々人の都合によってすればよい。寺の中には、布施の額が多い場合、大きい灯を吊してくれたり、そうではない場合には小さいものを吊したりする寺もあるが、これはごく少数の寺で見られるものであり、普通はそのような区別はしない。

灯の数も過去には家族の人数に合わせて吊したが、今日では一つの灯に家族みんなの名前を書いて張りつける形式をとるようになった。高麗時代には官民のみならず、老若男女みんなが初八日行事に参加していたし、また朝鮮時代においても老若男女みんなが参加する民俗行事として継承された。今日ではこの行事は仏教と関わりのある人々のみに限られて来ているが、元々四月初八日が、仏教的意味の行事であっただけでなく民俗行事でもあったということは、この日に行われる様々な楽しい民俗的遊びを見れば、充分に理解できるであろう。またこのことは、村中の人々がみんな山に登って灯吊しの光景を眺め、集まってくる人たちと観灯遊びをしたり各種の伝統音楽を奏でて楽しんでいることからもわかる。

また、この日子供たちは灯の棒の下に石楠の葉をつけた松餅(ソンピョン)と黒豆、セリの和え物を並べておくが、これは釈迦誕生日に簡素な食べ物で客を迎え「楽しむ」という意味の遊びである。そして灯の棒の下に席をもうけて欅の餅と塩で焼いた豆を食べながら、水甕に水を注いでひさごを伏せておいたまま、順番に回りながら叩くが、この遊びをスブ(水遊び)という。
このような民家の遊びとともに、寺では四月初八日を記念する法会を催され、信徒たちは成仏図遊びや塔まわりなど仏教的な遊びを行った。特に、子供の日がなかった時代にはこの日はいわば子供の日の代わりであった。初八日となれば寺の前には盛大な市が立ったが、商われたのは、その多くが子供用品であった。子供たちにとっては、親といっしょに寺に行って礼仏をあげ、帰りの道で珍しいおもちゃを買ってもらうという楽しい日であった(8)。

韓国では、四月初八日の釈迦誕生日を国民的な行事として祝うが、この日を祝日に定めたのは、以上のような経緯からである。

筆者の幼いとき、韓国では、四月初八日は祝日ではなく、またあまり華麗な行事も開かれていなかった。しかし、最近になって寺ごとにかなり派手な行事を行い、多くの人々が集まってくるようになってきているのである。以前と比べて特に変わったことは、キリスト教の指導者や天主教の指導者、その他宗教の指導者たちが四月初八日に寺に来て行事に参加しているのをよく見かける点である。仏教では「四月初八日法会」と言うが、天主教神父らがこの法会に参加し合唱までするのを見ることができる。まことに良い現象である。すべての宗教は根本的に同じ真理に立っており、多元的な宗教状況においては寛容の精神を持っていなければならないからである。寛容の精神は、宗教においてこそより円満に発揮され、その実を結ぶことができる。しかしながら、社会全体をみるとき、寛容の精神を実現するには困難が多いことがわかる。

② イエスの誕生とクリスマス

韓国でのクリスマス行事は、一言でいえば、現在あまりにも商業化し過ぎている。これは、韓

(8) 同上

国だけでなく日本を始め世界的傾向と思われるが、クリスマスの元来の意味を守ることは次第に難しくなっているのではないだろうか。11月となれば感謝祭とともに百貨店にはクリスマス・キャロルが鳴り響き、クリスマスの純粋な雰囲気よりも、商業文化といった印象が目立つ。韓国では、釈迦誕生日と同様に12月25日を祝日に定め、すべての国民が休みをとる。教会や野外に出る人々も多く、楽しい一時となっている。

イエスがいつ生まれたかについては、その正確な日を知ることはできないが、多くのキリスト教徒たちは、伝統的に12月25日をイエスの出生日に定めてこれを記念している。しかし、現在でもアルメニア教会のある幾つかの国では1月6日を聖誕日としている。12月25日をクリスマスとして守る慣習が定着した時期は、西方教会では4世紀半ば、東方教会では5世紀末と推定される。この日を出生日とした理由は正確には分からないが、多くの研究者たちは、古代ローマで冬至に行われた祭りと緊密な関係を持っていると考えている。元々ローマでは、冬至（日が最も短かった時期から再び長くなり始める日）を起点にして、農耕神であるサトゥルヌス(Saturnus)[9]と太陽神であるミトラス(Mithras)[10]を崇拝する祭りが行われていたが、コンスタンティヌス大帝がキリスト教を公認した後、ローマの教会はローマの伝統的な祝祭日をイエスの誕生と同一視し、多くの人々をキリスト教に引き込もうとした。当時ミトラス崇拝とサトゥルナリア(Saturnalia、12月17日から24日までの農神祭)が広く大衆に影響を及ぼしていたため、その風習を抑圧する代わりにキリスト教に同化させ、太陽にたとえられる「世の中の光り」であるイエスの誕生を広く知らせようとしたのである。このような考え方は次第に広がってゆき、イエスの神性を否定するアリウス主義(Arianism)と対立する正統教会が確立する中、強化されていった。こうして、イエスの誕生日は12月25日とされるようになったのである。この日はヨーロッパで最も重要な祭日である。後にプレゼントのやり取りを行う風習が流行するが、聖ニコラオス(St. Nikolaos、シンタクラース、なまってサンタクロース)はそのシンボルとなった。また15、16世紀にはイエスの誕生を素材にして多くの芸術作品が登場するようになる。しかし、宗教改革後、クリスマスは、ピューリタンおよびカルヴァン派によって、異教徒の風習であると排斥され、クロムウェルにより英国ではこの日に祭儀を行うことが法的に厳禁されたのみならず、商店には通常通り店を開けるよう通達が出された。このことが米国のニューイングランド地方にも伝わり、1856年以前には法定休日と認められなかった。だが、多くの人々はこの日となるとプレゼントの交換などをしながら伝統を引継ぎ、19世紀に至ってクリスマス・ツリーやクリスマス・カードという大衆的な風習が付け加わることになり、広範囲に大衆化されていったのである[11]。

ここで、現在韓国でも通常行われるクリスマスに関わる様々な風習の由来を辿ってみよう。まず、クリスマス・ツリーである。クリスマス・ツリーの起源は原始時代の樹木崇拝と関連させることもできるが、より近い時代で言えば、中世ドイツの神秘劇（クリスマス・イブにキリスト

(9) 霜田美樹雄 『キリスト教は如何にしてローマに広まったか [新装版]』 早稲田大学出版部 1997年
(10) ペルシャ起源といわれる古代の密儀宗教。ローマ帝国の領土拡大に伴い次第にローマ帝国内で流入するようになり、軍隊を中心に広まるが、同様に救済宗教であったキリスト教が公認されて以降は迫害され衰退した。
(11) http://www.koreandb.net/holiday/heritage/day0408.htm

降誕劇の序幕としてアダムとイヴの堕落物語を演じた）との関係が指摘できる。この劇では、エデンの園を象徴化する「楽園の木」が用いられるが、劇が弾圧を受けてからは、この木は一般の家庭の中に持ちこまれ、砂糖、果物、キャンドルで飾られるようになった。この風習はドイツなど北ヨーロッパの国々に伝承されていたが、1894年にはヴィクトリア女王の夫であるアルバート公によって英国に紹介された。また米国には19世紀初めペンシルベニア地方に移住したドイツ系移民によって伝えられ、すぐに米国全域に広がっていった。明かりをつけたクリスマス・ツリーを公共の場所に置く風習は米国から始まったのである(12)。

クリスマスイブである24日からクリスマスの25日にかけて、世界の各都市の繁華街には多くの人々が集まり、夜を明かして楽しむ。これはまるで祝祭の雰囲気のようである。これに比べ、農漁村では教会で厳粛にイエス・キリストの誕生日を礼拝するが、もっと簡素である。韓国でも19世紀末から20世紀初めにかけて米国プロテスタントの宣教師らによってクリスマス・ツリーを立てる風習が伝えられた。しかし、イタリア、スペイン及びラテン・アメリカなどでは、これはあまりありふれた風景ではない。

伝統的なクリスマスの色は緑色と赤色である。冬を越した生命またはキリストを通し与えられた永遠の生が緑色で象徴され、そしてイエスが十字架から流した血は赤色で表される。従って、この日に関連した装飾の色はこれら二色となる。赤いポインセチアの使用やクリスマス・リースの花輪はこれに基づいている。

さて、クリスマスと言えば、クリスマス・キャロルを忘れることができない。クリスマス・キャロルが現在のような形になったのは19世紀に入ってからである。「キャロル」とは、元々フルート演奏に合わせて踊る「踊り曲」を意味しており、明るくて軽快な繰り返しを特徴としている。イエスの誕生を祝う単純で律動的な歌としてのキャロルは、15世紀の英国で最盛期を迎えるようになったが、宗教改革後は、プロテスタントの影響でキャロルも微弱ながら維持されていたにすぎなかった。しかし、19世紀に入ってから、再びキャロルは脚光を浴びるようになった。

〈ああベツレヘムよ　Oh Little Town of Bethlehem〉、〈さやかに星はきらめき　Oh Holy Night〉など、この時期に作曲されたキャロルが現在まで歌われてきている。また世俗的な歌としては〈ジングルベル Jingle Bells〉、〈ホワイト・クリスマス〉などがある。英国の小説家ディケンス(Dickens,C.)が書いた〈クリスマス・キャロル〉(1843)という作品は、クリスマス及びこの際に歌われるキャロルを重要な素材としている(13)。現在、韓国の教会ではキャロリングと呼ばれる行事が行われている。たとえば、深夜12時～1時の間にチームを編成し、家ごとを訪問して、イエスの誕生を祝う聖誕歌を歌う。各家庭では聖誕歌を歌うために訪ねてくるチームにあげるためにプレゼントを用意しておくのである。

また、韓国ではクリスマスの時期となるとクリスマス・カードをつくり、一年間お世話になった人々におくるが、これもヨーロッパに起源がある風習である。その由来を見てみると、今のようなクリスマス・カードは1843年に、英国の挿絵画家であったJ.C.ホースリ(Horsley,J.C.)によっ

(12)同上
(13)同上

て始まられたことがわかる。彼は、カードの中にクリスマスを楽しむ家庭の姿を書き入れ、「あなたに楽しいクリスマスと幸せな新年を」(Merry Christmas and Happy New Year to You)」という文句を書き添えて、ロンドンで1,000枚を印刷して販売した。この風習は、1860年には英国各地に広がり、すぐに米国にわたって一般化された。1907年米国では結核を治療するためのクリスマス・シールが考案され、カードに付けて使われた。韓国でも米国プロテスタント宣教師らによってカードを送る風習が伝えられ、クリスマス・シールも 1933年米国メソジスト教会の医療宣教師であるホール(Hall, S.)によってはじめて発行された。

また、クリスマスを中心に盛大な宴会が開かれるが、そこではクリスマスのための特別な料理が出される。伝統的に英国ではガチョウや雄鳥などを材料にしていたが、16世紀末からはメキシコなどから入ってきた七面鳥を使うようになり、今でもメイン料理として認められている。

最後に、穏和で太った白いひげの「サンタクロース」(Santa Claus)であるが、この人物は、先にも述べた4世紀小アジアの聖者である聖ニコラオスに由来している。多くの善行を行い、プレゼントを運ぶことで有名なこの聖者のイメージは、小アジアからヨーロッパに伝来され、初期オランダの移住民たちによって米国にもたらされた。しかし、今のようなサンタクロースの姿は、1863年にナスト(Nast, T.)という漫画家によって作られたと言われている。

そして、この日のために馬小屋の模型がつくられ、その中には、赤ん坊のイエスを抱えているマリアとヨセフ、羊と鳥獣、赤ん坊のイエスの前で礼拝する東方の三博士の人形が配置される。これは13世紀に聖フランシスコ(St. Francis of Assisi)によって始まったといわれる風習であり、韓国でもソウルの明洞聖堂などで見られる(14)。

20世紀に入ってから、クリスマスは世界的な祝祭日となり、この日にはプレゼントを始め多くの品物が使用されるようになった。この大量の品物の生産と販売には、多くの企業が関わっており、今や巨大な経済効果をもたらしている。

③ 法然院のクリスマス

法然院は韓国釜山からはじまった大韓仏教宗団である。法然院の末寺は全国50ヶ所あまりにおよび、米国、中国、インド、日本などの外国にも寺をもうけているが、信者は約3万人くらいである。

法然院では、地方の寺のみならず本院でもクリスマス法会を開いている。前章で述べたように釈迦の誕生を記念するために四月初八日の法会に参加する各宗教の指導者はいても、仏教の寺でイエス生誕日にお祝いの法会が行われるのは、大韓仏教法然院のみであろう。2003年12月25日にクリスマス法会が華麗に開かれたが、2004年も同様であった。

韓国キリスト教会の各地の団体においては11時から聖誕のお祝いの礼拝が行わるが、釜山市蓮堤区蓮山4洞にある釜山法然院の本院でも、2004年12月25日11時に、「イエス誕生のお祝い礼拝」が開かれた。2004年は2003年より多い約3000人あまりの仏教徒たちが参加した。釈迦如來像が安置された法堂に数万個のキャンドルをつけ、天井にもやはり数万個の煙灯が吊してあった。

(14) 同上

普段、法会をするときは読経と木鐸の音ではじまるが、この日はクリスマスのイエス誕生を記念するため、クリスマス・キャロルではじめられ、またキリスト教会の礼拝を意識して教会の牧師が招聘された。法会の順序は司会者が「イエス誕生のお祝い礼拝」と告げ、それから讃美歌を歌い、信仰告白(使徒信条)の暗誦、次いで讃美歌「もろびとこぞりて」を歌った後、釜山市から来たメソジスト教会のジョンヨンムン牧師が登場して説教をした。

説教は、「多元的な宗教から見たイエス・キリスト」という題目であり、「イエスの生誕の祝い」がこのような立派な寺でも行われていることからもわかるように、イエスと釈迦は宗教的に近い立場の聖者であるという趣旨の御言葉が語られた。この話が終わると、仏教信者のなかには大きな拍手でこれに応答する者もおり、また「観世音菩薩南無阿弥陀仏」を唱える者、「アーメン」を唱和する者もいた。説教が終わってから、法然院の讃仏チームである「成仏歌団」による「もろびとこぞりて」の讃美歌の合唱があり、最後に、主祈祷文によってイエス生誕の祝いは結ばれ、数千名の仏教信者たちが昼食（供養）をとることでお祝いの礼拝は終わった[15]。

（4）仏教の戒律とキリスト教の十戒

最後に、仏教とキリスト教の類似性と差異性を戒律という点から考えてみたい。

仏教における戒律には、「沙彌十戒居士五戒」「比丘二五〇戒」「菩薩十重大戒」や、それから「四八軽戒」などがある[16]。それに対して、キリスト教には所謂「十戒」（出エジプト 20:3-17）があるが、それは、モーセがヤハウェ神から授けられたものであって、古代イスラエルの法規、いわば国家の憲法に相当するものである。釈迦の沙彌十戒などとキリスト教の十戒は類似点も多く、以下一つ一つ検討することにしよう。

第一戒。キリスト教の第一戒に曰く、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」。これに対して、仏教の第一の十重大戒（以下戒名とする）には「不殺生」すなわち生き物を殺すべからずとある。自殺したり、他人を殺したりしてはならない。これはキリスト教の第六戒

---

(15)『釜山日報』（2003 年 12 月 26 日付、林スンウン記者）には、次のように報道された。

寺に「もとびとこぞりて」。法然院、 鄭牧師招請　イエス誕生のお祝い礼拝

法堂で「イエス誕生のお祝い礼拝」が開かれ話題になった。飾り付けられた法堂では主祈祷文と讃頌歌が歌われた。キリスト教牧師と僧侶が一緒に法席に上がって、イエスと釈迦は同じだというメッセージを伝達した。

釜山市蓮堤区蓮山4洞法然院(会主　ゾヨン師)は、聖誕節の25日午前、仏教徒3,000余名が参加した中で、鄭ヨンムン牧師(釜山宗教人平和会の常任顧問)を説教者として招請し、「イエス誕生のお祝い礼拝」を開催した。キリスト教牧師が法席に上がって聖誕祝賀説教をしたのは釜山でははじめてであり、宗教界でも異例な出来事と言われる。

法会は「三帰依」や主祈祷を祝儀文として、万民を愛して十字架の苦行の道に入ったイエス様に栄光という誓願を含む「発願文」から始まった。続いて韓国の服に着飾った30余名の仏教合唱団が讃美歌「もろびとこぞりて」を歌って聖誕を祝う雰囲気をもり上げた。ゾヨン師は、イエス様は悟りの真理と博愛の精神を体現した方であり、宗教の違いを超越してイエスの偉大な思想を体得するのが我々の使命であると説法した。また、鄭牧師は、宗教人たちが不信の壁を崩して和合できるならば、戦争などのいろいろな不幸がなくなる、と語った。

(16) イムハクサン　『仏教とキリスト教の教理比較』ジンヨン社　1991 年、212 頁

と同じである。しかし、仏教の不殺生は、キリスト教の場合よりもはるかに徹底している。這う物、飛ぶ物、つまらない虫までも殺してはならない。経によると、酷寒の際、虱が出てくれば、竹の筒に綿を入れ込んで、餌をやれとあるが、これは虱の凍死や餓死を気にしてのことである。人間の目から見れば大した価値のないものにまでもこのように行うが、他のより価値のあるものに対しては言うまでもない。

第二戒。キリスト教の第二戒では、「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。 あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」と命じられているが、それに対して、釈迦の第二戒は、キリスト教の第八戒と同様に、「不盗」、すなわち、人の物を盗んではならないと教えている。ただし、金銀宝物だけではなく、針一つでも他人のものを盗んではならない、また税金や船代、車代を支払わぬことも物を盗むのと同様であると言われる。

第三戒。キリスト教の第三戒は「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれない」である。それに対して、釈迦の第三の戒名は「不淫」、つまり淫らな行動はすべからずというものである。キリスト教の第七戒に当たる。在家者の五戒では邪淫禁止のみが命じられているが、出家者の十戒では、あらゆる淫行を断つべきとあり、もし戒めに逆らえば、破戒を犯すということになる。『首楞嚴経』に曰く、宝蓮香比丘尼が人知れず淫行を犯して言うには、淫行は衆生を殺すのでも、盗みをするのでもない、だから、罪にならぬ、と。しかし、宝蓮香比丘尼は、突然体中で炎々と火が燃え上がり、生きたまま地獄へ落ちたと言われる。世の中には、こうした淫欲のため、身を滅ぼし家を潰す者がいるが、世俗を離れた出家人の僧侶がどうしてそのような淫行を犯すのか。生死に関わることでは、淫欲が何よりも根本的な問題である。そういうわけであるから、経に曰く、淫行する生活は純潔な貞操を守って死ぬに及ばず、と。

第四戒。キリスト教の第四戒は、「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という内容である。安息日はユダヤ教では土曜日を指すが、キリスト教の場合は翌日の日曜日をいう。釈迦の第四戒名は「不妄語」、すなわち嘘をつくことなかれである。キリスト教の第九戒に当たる。ただし、嘘には四種類がある。第一の嘘は「妄言」で、正しいことを間違っていると、逆に間違っていることを正しいと言うこと、また見たのに見なかったと言い、また見なかったのに見たと言うことである。これらはすべて虚妄で真実でない。第二は「綺語」と言い、まことしやか言葉（浮語）や、他人の気を引く言葉（摩語）を口先でうまくしゃべり、人の心身を持ち崩すことである。第三は「悪語」（悪い言葉）で、醜悪な悪口で他人を怒鳴ることを指している。第四は、「両舌」と言って、同じ口で別のことを言うこと、たとえば、最初は誉め合ったが、暫くしていつの間にか謗る、ある所では相手が正しいと言い、別の所に行っては間違っていると言うことである。両舌は人々を仲違いさせ、喧嘩をけしかけたりするものである。また、偽証で濡衣を着せたり、他人の短所をしゃべることなども、すべて嘘である。とくに、凡夫であるのに、聖人の位についたと言い、須陀果と斯陀含果などを得たと言うのは、「大妄言」(大嘘)であり、その罪は実に重い。しかし、災難

(17)http://www.buruna.org/amun/sami2.html

に遇った人を救うため、その一つの方法としてやむを得ず慈悲の心でついた嘘は罪にならない。古人曰く、自分を修めることは嘘をつかないところから始まる、と。出世間の道を学ぶ人はなおさらである。経に曰く、或る沙彌が、或る比丘の経伝詠みを耳にして、吠える犬みたいと嘲笑った。しかし、その比丘は実は阿羅漢であって、この沙彌を懺悔させた。こうして、やっとのことで、沙彌は地獄に陥る危機を免れたが、その体は犬になってしまった、と。そのことから、悪口一言の持つ害は充分に分かるであろう。経に曰く、人間の口の中には斧があって悪口を言えば自分の身を切ることになる、と[17]。

第五戒。キリスト教の第五戒は、「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」である。これに対して、釈迦の第五戒名は「不飲酒」で、酒を飲んではいけないと言われる。これは、キリスト教にはない戒名である。聖書にも酒に酔うことなかれとはある。これについて、現代では完全な禁酒と解釈する人もいるし、また適当に飲むのはかまわないと解釈している人もいる。釈迦の場合に問題とされているのは、酒が人を酔わせること、それが生じる影響、結果である。インドには様々な酒（すべて穀酒であるが、たとえば、砂糖大根や葡萄、それから花などで酒を醸したものもある）があるが、釈迦は、それらを飲んではならないという。重病で酒でないと治療できぬ場合は飲むべきであるが、何の理由もない場合には、一口の酒も口にしてはならない。さらには、酒の匂いさえ嗅ぐべきではなく、酒屋に行くことも、他人に酒を勧めることもいけない。昔、或る優婆塞が飲酒と共に他の戒までも犯したが、飲酒は決して軽い罪ではない。酒をしょっちゅう飲む人は死んで糞水地獄に落ち、次に生まれるときには馬鹿者で智慧種がなくなる。酒は精神錯乱の毒薬で砒霜よりも強い。だから、経に曰く、泥水を飲んだとしても、酒は飲んではいけない、と。

第六戒。キリスト教の第六戒は、「殺してはならない」であって、これは、釈迦の戒名の中でも第一のものである。もちろん、戒名に優先順位といったものはないが。これに対して、釈迦の第六戒名は、「不着香華不香塗身」であり、花束を被ったり、香料を身につけてはいけないという意味である[18]。花束というのは、インド人が頭に被る花を紐に繋いで束にしたものであるが、ここでは、錦や絹糸それから金銀などによって宝物としての装身具や冠を作って、着用するものである。また香料を身につけるとは、インドの貴族が好むような香りのよい粉を身につけることを指している。この戒名では、香りをつけたり、ほのかに漂わせたり、あるいは口紅や白粉などで化粧したりすることが、出家者にふさわしくないと述べられているのである。釈迦の法に曰く、袈裟を作る場合、獣毛や繭を使ってはならない。それは獣毛や繭のもとになる生き物を害するものであり、慈悲心にかなっていない。七十才にもなって綿入れの服でないと寒さに堪えられない老人は別にして、それ以外には綿服を着てはならない、と。昔、夏国の禹王は厚布の着用し、漢の公孫弘は麻布団を被ったと言われる。王と大臣という贅沢な生活ができる身分であるのに、そうしなかった。まして修行する人ならば、どうして華麗贅沢な暮らしを欲してよいであろうか。昔、高僧たちは草履一足を三十年間も履いたが、平凡な僧侶ならなおさら贅沢の欲望を警戒すべきで

(18) 同上
(19) イムハクサン　前掲書、207 頁

ある[19]。以上から考えれば、女性の化粧も戒名に違反することになり、また、現代見られる濃い化粧や整形手術なども釈迦の教えに逆らうものと言えよう。

第七戒。キリスト教の第七戒は、「姦淫してはならない」であり、これは、仏教では第三番目の戒名（邪淫してはならない）に相当する。これに対して、仏教の七番目の戒名「不歌舞倡伎不往観聴」は、歌、踊り、風流などは一切してはならない、またこれらを見に行ってもならないという内容である。昔、或る神仙は女人たちの美しく歌うのを聞いて神通力を無くしたといわれるが、見るだけでもそうであるに、まして自分の体を使って、歌い踊るなど、大変なことであろう。近頃、法華経、琵琶、光金具、揺鈴などが風流であるとして、それらを習う愚かな人間がいるが、しかし、法華経の教えは、仏様に供養するものであって、自分のためのものではない。世間を離れて出家した人ならば、どうして正しいこともしないで、歌と風流それから将棋、碁、双六、博打など、行ってよいであろうか。こうしたものはすべて、道を修める心を乱し、過ちを犯させるものであって、出家者は警戒しなければならない。

第八戒。キリスト教の第八戒は、「盗んではならない」であり、釈迦の戒名の中の第十の「不捉持生像金銀寶物」、すなわち金銀や他の宝物を欲することなかれ、あるいは二番目の戒名「不盗」（人のものを盗むことなかれ）と同じである。これに対して、釈迦の八番目の戒名は「不坐高廣大牀」、すなわち、高くて大きい寝台に座ることなかれ、という意味の戒律である。仏様の教えに、「如来八指」、つまり寝台は仏様の手で八つの指を越えないようにとあるが、これより大きい物は戒に違反するものである。また彩色や丹青を施したり、花紋を彫り込んだりしてはならない。古人たちは草枕して木の下で寝たが、今は寝台があり、これだけでも充分なのに、どうして、それをより高くまたより広くして、この虚しい身を楽にしようとするのか。脇尊者は生涯横腹を寝床につけなかった。和尚高峰は三年間寝台に座らなかった[20]。

第九戒。キリスト教の第九戒は、「隣人に関して偽証してはならない」であるが、仏教の戒名では、善き目的のため以外のすべての偽りを禁止している。善き目的とは、たとえば、命を救うことなどであるが、それ以外のものはすべて悪と言われる。その中でも、先の述べた妄語、綺語、両舌の三つは、まさに十大悪に属するものである。これに対して、仏教の九番目の戒名は「不非時食」、すなわち、非時なら不食せよというものであるが、僧侶は正午過ぎの食事が禁じられるという意味である。それは、天上界の人は朝食べる、仏様は昼召し上がる、獣は午後食べる、鬼は夜食べるが、僧侶は仏様の教えを学ぶのであるから、正午過ぎには絶対食べてはならない、という理由からである。昔、或る高僧は間借していた部屋でご飯を炊くのを見て、涙ながら、衰える一方の仏法のあり方を嘆いたという。現代人は、病弱で沢山食べなければならない人の場合、この戒名は当てはまらないと考えるかもしれない。確かに、古人は夕御飯を病気を治す薬石であると言っている。しかし、出家者は、これが仏様の教えに逆らうものであることを悟って、恥を知り、餓鬼の苦痛を理解し、いつも慈悲の心で済導すべきである。たくさん食べることなかれ、贅沢な食べ物を食べることなかれ、思う存分食べることなかれ、これをいつも心に刻んでいなければな

(20) 同上
(21) 注 17 と同じ

らない。もし、そうしなければ、大罰を受けることになるであろう(21)。

第十戒。キリスト教の第十戒は、「隣人の家を欲してはならない」、すなわち、あなたの隣人の家や隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならないということを意味している。ここで、貪欲は物質的なものなど様々な方面に関わっており、仏教の十大悪に相当する。なぜなら、貪欲という過度の欲心は罪を犯すことにつながるものだからである。十大悪に属するものは、殺生、盗賊、邪淫、妄語、綺語、両舌、悪口、怒鳴り、愚かなどであるが、この中で、貪欲を除外した九つは、この貪欲から生じる罪悪と言える。その点から、十大悪の中、貪欲こそ根本的なものであり、百八煩悩の第一のものなのである。もし、この貪欲を無くせば、すべての悪は無くなると言えよう。特に、仏教を修めるためには、何よりも、この貪欲を捨てなければならない。自警文という書籍によれば、人間は生まれときには空手で来て、死ぬときも空手で帰る、自分の宝物には気にしないのに、どうして他人のものを欲しがるのか。三日間の修行は千年の宝物であり、百年の貪欲は一日の塵界である(22)。これに対して、仏教の十番目の戒名は「不捉持生像不銀寶物」すなわち、金銀や他の宝物は持つことなかれという教えである。金や銀、そして宝物（七宝とその類）はみな、貪欲を起させ、道を乱すものである。仏様がゴータマ・シッダルタとして地上にいらっしゃったときには、ご飯だけでなく、家も服もすべて施してもらったのであり、金銀宝物などは絶対手にはされなかった。畑を鋤き起こして、金を見つけても、目を反らすことは、世間の人にでもできることなのに、貧道と名乗る僧侶が財産を持つことに何の意味があるか。貧乏人を思って絶え間ない布施を施すべきであり、お金を儲けたり貯たりしてはならないし、商売もしてはならない、貴重な七宝で服と家具を飾ってならない。もし、そうでなければ、大罰を受けることになるだろう。出家者は、警戒しなければならない(23)。

3　結論

本論文は、仏教とキリスト教とを比較するために、二人の教祖釈迦とイエスに焦点を合わせて考察を進めてきた。二人の名称や誕生の問題、そして誕生に関わる儀式や戒律の問題である。これによって、仏教とキリスト教という二つの宗教が、様々な類似性と差異性を有することはある程度明らかにできたと思われる。もちろん、こうした比較宗教研究には、今後行うべき様々な課題がある、たとえば、アメリカの宗教学者ガード（Richard A.Gard）は、次のように指摘している。

> 「宗教の比較研究において、仏教とキリスト教の比較対照が行われてきたが、ほとんどの研究者たちはまだ十分に満足できる結論に至っていない。というのも、彼らはこれら宗教の歴史的や制度的な側面を十分に考慮せずに、あくまでも教理的な側面だけを扱っており、またそ

(22) 注19と同じ
(23) http://www.buruna.org/amun/sami2.html
(24) 劉在信　『仏教とキリスト教の比較研究』大韓基督教出版社　1985年、10頁
(25) 同上

の分析においても、体系的な比較方法や諸宗教に共通する学術用語を用いる段階に到達していないからである。」(24)

また、日本の宗教研究者の松谷文雄は「二つの宗教が比較される場合、その分析には著者自身が信じている宗教を支持するといった偏見が伴っている。著者は予め下した結論をもってスタートして、自分の宗教を擁護し、煽てあげ、他の宗教をけなすのを実際の目標にしているのである。そういう比較はいくら詳しい内容を伴っていても、学術的な作業とは言えない」と語っている(25)。

ガードが指摘した、体系的な比較方法を生み出す努力や歴史的制度的な側面の考証が足りないこと、また松谷の指摘した、研究者が自己の宗教ばかり擁護する傾向にあることなど、いずれも宗教を比較する上で、問われ続けなければならない問題である。本研究は、こうした問題点を意識しつつ、イエスと釈迦の誕生の背景やそれぞれの宗教の戒律を比較検討した。その結果、もちろん文化的背景や歴史状況から来る様々な相違点はあるものの、通常考えられる以上に、著しい同質性をみつけることができた。おそらく、さらに比較の対象を広げるならば、さらに多くの類似点を見つけることができるであろう。今後の研究課題である。また、こういう類似点の解明を手がかりに、仏教とキリスト教との相互理解と交流を深め、東アジアにおける寛容の精神の発展に寄与してゆきたい。

◆参考文献◆

1．イムハクサン 『仏教をキリスト教の教理比較』 ジンヨン社　1991年
2．チェソクホ、パクイスル 『人間ブッダ　その偉大な生涯と思想』 中央仏教教育院出版部 1990年
3．Robert H. Stein（ハンヨンチョル訳）『メシアイエス』 韓国基督教出版部 2001年
4．リュ花信 『仏教と基督教の比較研究』 友一文化社 1985年
5．ビョンソンハン 『仏教とキリスト教－対話の神学－』 鐘路書店 1994年
6．バクキョンフン 『釈迦の生涯』 仏先出版 1991年
7．ハユサン 『人間イエスと仏陀』 シンワン文化社 1984年
8．遠藤周作（金炳傑訳）『イエスの生涯』 三星社 1983年
9．山形孝夫 『聖書の起源』 講談社　1997年
10．山形孝夫 『聖書の奇蹟物語』 朝日新聞社　1991年
11．塚本虎二 『福音書異同一覧』 新地書房　1981年
12．南山宗教文化研究所編 『キリスト教は仏教から何を学べるか』 法藏館　1999年
13．門脇佳吉編 『密教とキリスト教』 創元社　1985年
14．南山宗教文化究所編 『天台仏教とキリス教』 春秋社　1988年
15．八木誠一、秋月龍眠 『禅とイエス・キリスト』 青土社　1989年
16．八木誠一、秋月龍眠 『親鸞とパウロ』 青土社　1989年
17．滝沢克己 『仏教とキリスト教』 法藏館　1981年
18．山折哲雄 『神と仏　日本人の宗教観』 講談社　1983年
19．秋山さと子 『科学と仏教の謎』 大和書房　1987年

（ほう・ゆう　大韓仏教・法然寺住職、京都大学文学部外国人共同研究者）